

## 富永健一先生の人と学問を語る会

日時：2019年5月26日（日）午後1時～4時半

場所：東京大学本郷キャンパス法文二号館一番大教室



### ◆ 徳安彰



皆さま、大変お待たせいたしました。ただ今より「富永健一先生の学問と人を語る会」を始めさせていただきます。

富永健一先生は去る2月23日にお亡くなりになり、その後2月の末にご葬儀があったわけですが、2月の末というのは、特に大学関係者にとっては忙しい時期で、葬儀に参列できなかった方、あるいは連絡が届かなかった方など、いろいろいらっしゃいました。そのため、改めてこのような会を開かせていただくことにした次第でございます。

本日は富永先生の学問について、また富永先生のお人柄について皆さまとお話をしていただければと思っております。申し遅れましたが、私は本日司会を務めさせていただきます、現在、法政大学社会学部の教員をしております徳安でございます。よろしくお願いいたします。

それではまず開会にあたりまして、本日の会を企画した発起人を代表して、今田高俊先生にごあいさつをいただきたいと思います。

## 発起人挨拶

### 一本企画の趣旨について—

今田高俊（発起人代表・東京工業大学名誉教授）

2



本日は暑い中、故・富永健一先生の学問と人を語る会にご参集いただき、ありがとうございます。発起人一同を代表しまして、今田高俊がごあいさつをさせていただきます。

富永先生は戦後日本の社会学の一時代を画した仕事をなされた方だと、われわれは考えております。今日、3 名の方が富永先生の学問と人柄を語るということで登壇していただきますが、日本社会学会、経済社会学会、社会学史学会からと、幅広い分野からお話いただきます。

私も含め、発表される 3 人の先生方が薫陶を受けたのが、1970 年±5 年ぐらいでしょうか。富永先生の学者としてのピークは 70 年代初頭だったと思いますが、今日発表いただける 3 人は、その時代に薫陶を受けた方々です。

富永先生の当時の口癖は、「理論と実証をきちんとやらなければ、社会学者とはいえない」で、来る日も来る日も念仏のように、そうおっしゃっていました。

先生の最大の功績は、日本の近代化と社会変動について体系的に整理をされ、日本の戦後の発展に寄与された点にあります。言ってみれば社会変動論が理論、社会階層論が実証で、この二つが大きな柱になって富永社会学を支えてきたのです。

今日も話題になると思いますが、1970 年いっぱいぐらいまで、富永先生が日本で主導されてきた構造・機能分析が大きな影響力を持っていました。学会のある部会で構造・機能分析を批判しているらしいという噂を聞いて会場に駆け付けたことがあるのですが、富永先生や吉田民人先生、小室直樹先生が激しく反論する姿を何度も目撃しました。

私自身は生物学への進学を志望していて、文転して社会学に来たものですから、学会の細かな事情はよくわかりませんでしたが、活気に満ちていたのは確かです。ところが 80 年代に入ると、「もう構造・機能分析も終わりだ」という雰囲気ができあがり、構造・機能分析を専門にする学生も少なくなりました。この機会に、ぜひとも言っておきたいことがあります。

橋爪大三郎、志田基与師、恒松直幸の三氏が構造・機能分析を根底的に批判したとされていることへの私の評価ですが、彼らの主張は、アローの不可能性定理を使って「複数の機能要件を合成するのは不可能である」ことを論証した点にポイントがあります。構造・機能分析では社会変動を説明できないとされたのですが、その機能的要件とは、もともとバイルズという小集団社会学者が、ある課題を背負った集団がその課題を達成するために行われた活動をピックアップし、それを整理して AGIL の 4 要件にまとめたものです。つまり AGIL は、もともと課題を達成するための手段だったのです。ところが、この機能的要件がいつしか目的として理解されるようになって、話が複雑になってしまいました。こうした軛から抜け出て、機

能分析が行うべきことは、まだたくさんあるように思います。

唯一、こうした理解に沿った形で進められた研究が社会指標論です。社会指標は、機能的な達成を指標化したものですから、これによってモデルを作り、どのように機能的達成がなされたかが分析されるべきだったのですが、うまくそれがなされないまま、今日に至っていると思います。

今日、本日ここに 3人のメンバーからご報告いただいて、それをベースに会場の皆さんともいろいろ意見を交換できればありがたいと思っています。よろしくお願いいたします。

#### ◆徳安彰

今田先生、ありがとうございました。それではプログラムに従って、第 1部「富永先生の社会学を語る」に入りたいと思います。

最初に盛山和夫先生に、社会学理論の視点からのお話をいただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

### 第 1 部 富永先生の社会学を語る

#### ◆盛山和夫

## 社会学理論の視点から

盛山和夫（東京大学名誉教授）



盛山です。不肖の弟子ではありますが、本日は大変お世話になった富永先生の社会学を検証する機会の一つだと考えまして、先生の社会学について一言述べさせていただきたいと思います。私が、学部の富永ゼミに入ったのは 1969 年です。その後続いて大学院に進学して 1971 年から大学院のほうでも指導教官として先生にお世話になりました。私より先輩のお弟子さんという点では直井優先生とか厚東洋輔先生など何人かいらっしゃいます。ただ、私などの世代から、先ほどの今田先生も含めて、大学院のゼミのメンバーも増えてきました。富永ゼミでは特にパースンズと一緒に読むということがあり、非常に分かりにくい文章や考え方をなんとか頑張って読んだという記憶があります。

富永先生の社会学は、大きく分けて(1)社会変動の理論、(2)社会学の原理論、(3)社会階層論、それに(4)近代化論という、4つの柱があるように思います。

先生の出世作といいますか、先生の名を世に知らしめたのが『社会変動の理論』（1965）でした。まだ先生が 34 歳ぐらいの時です。同書をあらためて拝見しますと、今の私から見てやや未完成という印象があります。先生にもそれは自覚がおりだったと思います。実際に全体の構成

を見ますと社会変動の理論について書いてあるのは、全 4 章のうちの最後の第 4 章においてです。ずっと後、ほぼ 30 年後に先生は放送大学のテキストを元にして『近代化の理論』を講談社学術文庫で刊行されますが、それがあある意味で富永先生の社会変動の理論の完成版になっていると言えるかと思います。

とはいえ、『社会変動の理論』には先生らしい着想がいろいろと散見されます。まず言えることは、この時期の先生はパーソンズを一生懸命勉強されており、その『経済と社会』も翻訳されたりして、この『社会変動の理論』にもパーソンズの影響が大きいのではないかと思います。これは誤解している人や気づいていない人が多いかもしれません。『社会体系論』の終わりのほうでパーソンズは、変動の理論に取り掛かるにはまだ社会体系の議論とか概念枠組みが十分ではないと述べています。そういう自覚を当時のパーソンズは持っていたわけです。それは当然、富永先生はご覧になっているんですね。したがって、いわばパーソンズを乗り越える形で先生自身は『社会変動の理論』に独自に取り掛かれたと言えるのではないかと思います。

先生の変動論のキーワード、あるいは基本的な考えが、社会変動とは社会構造の変動であるという命題です。先生は社会構造の概念をディファインされるのにいろいろと苦労されていますが、最終的に「制度化された規範による人員配分および所有配分の、持続的な配置として定義づけられる」とされます。ただ、私としては「社会構造」の概念はこのように定義するのではなく、むしろ研究関心あるいは前提的な理論によって異なって概念化されるものと考えた方がいいと思います。

もう一つ重要なコンセプトとして、最後のほうで「変化における均衡」という概念とか「社会体系が安定的な状態を保つための条件」という形で、後に「機能要件」と言葉で表現されるようになるコンセプトが示されています。この本では「機能要件」という言葉は出てこないのですが、実質的にはこの段階で機能要件という概念を考えられていたと言えます。そして、機能要件が充足されないという問題が起こるときに社会変動が起こるという図式が萌芽的に語られているという形の著作になっております。

ここでややついでに社会指標について述べますと、私は富永先生とはごくわずかしき共同研究を行っていないのですが、そのわずかな共同研究の一つが、1971 年から 72 年にかけての社会指標の研究です。もっとも私自身は、なぜ社会指標なのかという疑問をずっと持っていました。当時はあまりその問題について先生とお話しませんでした。後、1996 年ですか、『近代化の理論』の中で書かれている文章を見ますと、「社会システムのパフォーマンス水準」という概念をお使いになっています。つまり、その水準を測定するのが社会指標であるというお考えであったようです。これは次の原論の話と関係しているのですが、システムというあるまとまりがあって、そのパフォーマンス水準というのがいわば機能要件のようなものを満たす水準というものとして位置づけられている。こうした考えがこの段階で既におありになって、データを収集してこれを解析するというのが社会指標の研究として意義づけられていたのだと思います。

次に、先生の仕事はこのあと社会階層の研究に移っていきます。先生の根本は理論社会学ですから、本当は、社会変動の理論から原理論のほうに移られるのが多分順当だったのではないかなと思うのですが、実際上はそうはなりません。『社会学原理』という先生の社会学

理論のコアの部分を展開されるのは 1985 年ですから、『社会変動の理論』が出てから 20 年後ということで、かなり時間が空いているわけですね。その間、次にご紹介する社会階層論のほうに取り組みだいたわけです。テーマ的には『原理』のほうが変動論に近いのでこちらについて先にご紹介します。

(2)の原理論に関する先生のテーマの一つは、まず「社会学とは何か」という問題です。これは、この『原理』ではないのですが、これを元にして後に出てきた『社会学講義』(1995)のほうで明確に触れてあるものです。そこでは、「社会学の学生をずっと教えてきていて 0B から話を聞く機会があるけれども、社会学を卒業した学生の話の中に、世の中に出てから時々、社会学って何ですかって世間の人に聞かれて一瞬たじろいってしまうようなことがしばしばある」という趣旨のことを、富永先生自身が紹介されています。

社会学というのはディファインするのが難しい学問です。その問題意識から、先生自身が社会学をどうディファインするかということに取り組みだいたわけですね。その時の先生の戦略は、「狭義の社会」というコンセプトを立てることで社会学の固有の研究対象をディファインしようと、アイデンティファイしようという戦略でありました。狭義の社会とは「複数の人びとのあいだに持続的な相互作用の集積があることによって社会関係のシステムが形成されており、彼等によって内と外とを区別する共属感情が共有されている状態」として定義されるものです。それに対して広義の社会にはそこに経済があつたり政治があつたりという形になりますので、経済学とか政治学と区別がつかない。そこで社会学の固有の対象として、狭義の社会というのを考えていかれたわけですね。

その狭義の社会というのは、今読んでみると、普通にわれわれがいわゆる社会と呼んでいるものがインプライされております。ではこの社会とはどういうものかということ、本当は社会学でもきちっと解決が付いていない。少なくとも一般的に言って解決が付いているコンセプトではない。これについては富永先生もお読みになっているかもしれませんが、70 年代ぐらいから盛んに議論があるところですね。

私から見ると先生の狭義の社会のコンセプトは、いわゆる日常的な「社会」概念つまり一次理論としての「社会」概念をそのまま理論的概念に持ってこられていて、分かりやすいのですが、学問的な観点からはいろいろと突っ込みどころがあるように感じています。先生には、まとまりのある社会というものがあるということについての信憑性が非常に根強くあつて、それが先生においてはシステム論へと非常にスムーズに移行していく、あるいはシステムというコンセプトが違和感なしに使われているということと深く関係しているのだらうと思います。

このように、先生には機能主義的な考えが非常に根深くあるわけですね。しかしよく見ると、先生には二元論的なところもおありだと思ふんですね。つまり社会学に元々あるわけですが、方法論的個人主義と集合主義、あるいは行為論と社会システム論。そういう対立についてどう考えるかという問題ですね。その両者をどういうふうに接合されるのかという点に注意して読みますと、先生の中では両方が全然違和感なく結びついているわけですね。というか、両方のアプローチが社会学を支えるんだという観念をお持ちですね。どちらかだけ、つまり集合主義やシステム論だけというわけではなく、必ず他方に個人の欲求充足とか行為とか、そういういわばミクロ的なものが、常に両輪としてセットされている。そういう理論構造を先生は使われているというふうに見ております。

さて、次に (3) 社会階層論に入りますと、これは 1975 年の SSM の調査を中心に展開されている

わけですね。これについては先生が、『社会学 わが生涯』（2011）という自伝でお書きになっていますが、もともと社会階層論に限らず実証的研究あるいは計量研究は先生がご自分でエキスパートとしてなされるというような領域ではないわけです。ただ、いろんな経緯があつて、たとえば第1回の1955年SSM調査は尾高邦雄先生が主導されたのですが、有斐閣から出た出版物としての報告書の一つの章を当時院生であつた富永先生が執筆を担当されているわけです。多分尾高邦雄先生からぜひ手伝いなさいとか何か言われて誘われたのだらうと思うのですが、いずれにしてもそこから社会階層論に手を染められた。

次の1965年のSSM調査は安田三郎先生が主導されて富永先生も研究メンバーとしては参加されたようですが、実質的にはほとんど関与されなくて、安田先生がほとんどすべてを推進されたという風に伺っております。ところが、にも関わらずというか、第3回のSSM調査は富永先生が自分がやるんだという自覚をどこかでお持ちになったようです。『社会変動の理論』が65年に上梓されますが、65年はちょうど第2回の安田三郎先生主導のSSM調査の実査が遂行されている年です。多分『社会変動の理論』をお書きになってこれが刊行されたあたりから、次の先生自身の研究テーマはまず階層論なんだということを自覚されていたようです。そのことはご自分でもお書きになっていますが、ここに持参しました小冊子『社会学とともに』（1992）、これはご退官のときにいただいた原稿をもとに作ったものですが、その中でも変動論の後には階層論をやるんだというふうに決意されたことが述べられています。

それで慶応大学のプロジェクトを通じて1968年から69年にかけて先生にアメリカに留学される機会が生じましたが、その機会をもっぱらコンピューターと統計学の勉強に充てられるという努力をされた。それを元にして、戻ってこられて75年のSSM調査研究を推進されたということだと思います。

1975年のSSM調査研究をまとめた『日本の階層構造』（1979）は大変評判を得ました。また、その時に参加した今田先生とかその他多くの若い研究者がここから育っていきました。この1975年のSSM調査研究のポイントは「産業化テーゼ」です。産業化テーゼは、ほぼ同時代D. トライマンというアメリカの社会学者も出しております。しかし富永先生はそれとは独立した形で明確に産業化テーゼつまり「産業化とともに社会階層は基本的に平準化していく。社会移動も増大していく」という理論を展開されました。これも先生のまったくオリジナルで独自の議論の展開だったというふうに思います。

第4の近代化の理論。具体的に『日本の近代化と社会変動』（1990）とそれに続く『近代化の理論』（1996）はある意味では、やや未完成に終わった社会変動の理論の完成版だと私は思っています。ただし、すべては新しく展開されたもので、いくつかの理論的な装置が新しく導入されております。たとえば機能分化とか構造分化という概念が明確に導入され、そういうものが分化していくことが社会変動を作っていくんだということ。それから一方でテーマは近代化ですが、近代化という社会の一般論ではなくて、近代化という観点に焦点をあてて近代社会の変動メカニズムを記述するというのが、近代化という問題意識の中で明確に組み立てられているということが明らかになっています。

時間がオーバーしましたので、最後に富永先生社会学の特徴というものを簡単にまとめました。近代化理論について補足しますと、先生の近代化というコンセプトには「社会発展」という理念が明確にあるというふうに思います。近代化とは何かが発展していくことだという観点です。もちろん先生は、同時に、近代化の中にある、あるいは社会変動の中にある、いわば発

展に対抗して元に戻ってしまうような動きにも大変注目されています。つまり、富永先生にとっての近代化というのは決して着実に前進していくようなプロセスではない。スムーズに行かないことが常に存在している。それは、戦前から戦後の日本社会を見ていらっしゃった先生としては当然そういう認識はおありなわけです。けれども、そういう中にも先生の場合は理念としての近代化、つまりいい意味でのリベラルな価値——最近この言葉は、いろんな使われ方をされていて困るのですが——というものを進展させていくプロセスとしての近代化、社会発展というものを想定されており、それをベースにしながら社会変動の理論というのを組み立てていこうとされている。それが先生が一番の問題関心であったというふうに思います。

ただ、私自身の観点から見ますと、先生の理論は一次理論的な側面が強すぎて、日常生活者のコンセプトから脱しないレベルで理論化が進められていることとか、またシステムというものの信託度が強すぎるとか、そういう点については違和感があります。この点については、また別の機会に議論できればと思います。

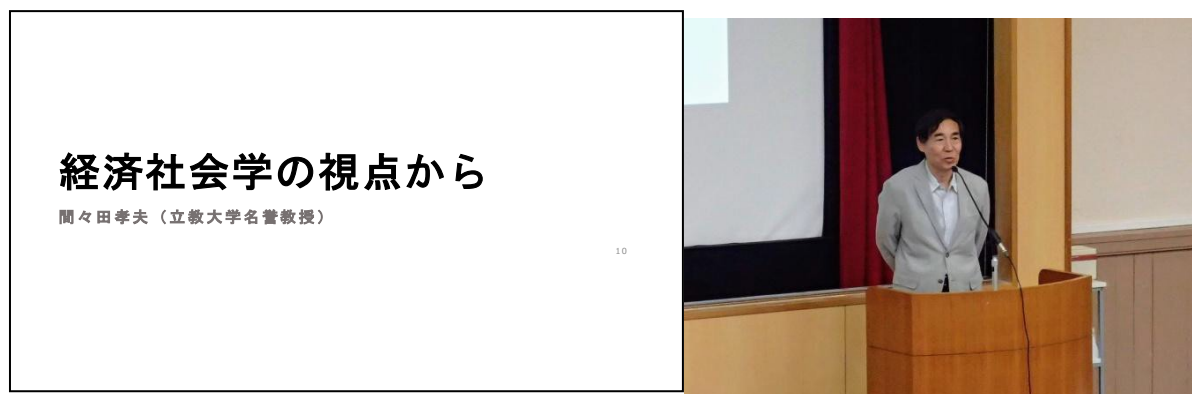
あと先生のもうひとつの特徴は、理論と実証とを常に両輪に置きながら研究を進められたとことがあります。たとえば晩年と言うとやや言い過ぎなのですが、先生は 60 歳前後の時には福祉国家論に関して非常に深い考察と分析を展開されております。こういう先生の理論と実証とを両方とも推進していくという姿勢は、弟子のわれわれにとっては、勉強になるし、励まされるし、大変刺激を受けるものでございます。

以上、簡単ではありますが、これで私の報告とさせていただきます。

#### ◆徳安彰

盛山先生、どうもありがとうございました。続きまして、経済社会学の観点からということで、間々田孝夫先生にお話いただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

#### ◆間々田孝夫



私は、富永先生の経済社会学的研究ということについてお話をしたいと思います。富永先生は、社会理論研究家としての側面が非常によく知られていますが、富永先生は同時にかなり経済社会学にご熱心であったという、そういう側面をこれからお話していきたいと思います。

私の今日の話には三つぐらいのテーマがあります。まずわかりやすいところで、経済社会学としてどのようなお仕事をされていたのかということを申し上げ、次に富永先生の経済社会学とはどういう内容だったのかということを、二つに分けてお話ししたいと思っております。

まず、富永先生ご自身があちこちで話をされていたと思うのですが、大学院生時代に経済学にかなり関心を持たれていたということがあります。社会学を勉強していたけれども、経済学も勉強しようという、ある意味、非常に欲張りなことを考えておられました。当時、東大の経済学研究科に大石泰彦先生という方がおられ、近代経済学の授業をやっておられました。そのゼミに、社会学の所属でありながら参加していたという事実があります。そのころから経済学に並々ならぬ関心があったということですね。

次に経済社会学ということであると、経済学もやり、社会学もやるという点で富永先生よりかなりの先輩で、高田保馬さんという、著名な経済学者であり、社会学者ともいわれる方がいました。富永先生は、高田保馬の本もかなり熱心に勉強されました。それからパーソンズですね。当時代表的な社会学者であったパーソンズは、『経済と社会』という本を書いていた。それを富永先生が翻訳されたことは、よく知られていると思います。パーソンズは経済を包含するような社会学ということを考えていて、そこが富永先生の興味を非常にそそったということのようです。

はっきり経済社会学ということを打ち出したのは、ここに書いてあります 1974 年です。『経済社会学』という本を東大出版会の講座で出された。これは最初予定に入っていなかったそうで、それを当時の福武先生に、(無理やりかどうかはわかりませんが) 頼み込んで『経済社会学』という巻を入れたと、先生ご本人が書いておられます。

それから、たいへん有名な在野の研究者小室直樹先生との交流がありました。経済学を学んできた小室さんと社会学を学んできた富永先生が、お互いに刺激を与え合ったということですね。

そして、そのしばらく前に、経済社会学会というのができました、1960 年代後半のことです。富永先生はこの学会に長らくおられて、ここに書いてあります 1990 年、1994 年と 2 回に亘って 会長を務められました。

そしてさらに、富永先生には二つの博士論文、東大で提出されたものと京都大学経済学部に出されたものがあるのですが、最初の『社会変動の理論』という本には、サブタイトルに小さく「経済社会学的研究」と書いてあります。それから京都大学に提出した博士論文をまとめた『経済と組織の社会学理論』という本ですが、その序文とか最初のほうを読むと、経済社会学のことをよく考えていることが分かります。経済学部に出した論文が元ですから、これはまさに経済社会学に関係する本であるというような意識があったようです。

今まで挙げたような経済社会学に関するお仕事は、それだけで一人の社会学者としては十分過ぎる研究成果と言えるでしょう。

では次に、経済社会学というのは何をするのかという話に入りましょう。つまり経済社会学の方法についてです。

経済社会学というのは、経済についての社会学ですから、経済のことを社会学で扱うという、そういうイメージでとらえられます。私はそれをさらに①、②の二つに分けています。①は、経済学が扱ってきたような現象を社会学的に分析し、問題を解決するというものです。たとえば、日本が今ほとんど経済成長しなくなった。経済学では原因がわからないので、それではと社会学的方法で分析したところ、ここがいけないということがわかった。そこで社会学者に任せたら、たちまち日本の経済成長率が回復した——こんなことができればまさに大成功ですね。

ところが②の経済に関連する社会現象だが経済学が扱わない現象の解明というのは、ちょっと違います。①のような話ではなくて、経済に関係してはいるのだけれども、今までの経済学者というのはある固定した枠にとらわれているので、目を付けないような分野がいろいろあります。そのテーマのうち社会学に近いようなことを研究していこうというのが②です。富永先生もそうで、私もそうなのですが、正直①で行ければ一番かっこいい。経済学者の鼻を明かすことができます。それはそうなのですが、実際は①は非常に難しいことです。富永先生も①で行こうというようなことを時々書いておられるのですが、それがなかなかできなくて、むしろ②の方向に進まれたのではないかというふうに思っております。

それから、①に関係してくるのですが、社会学には文化論的アプローチというものがあります。例えばエズラ・ヴォーゲルという人がいて、『ジャパン・アズ・ナンバーワン』という、昔話題になった本があります。この中でヴォーゲルは、日本はこんなに文化と社会が素晴らしいからこれだけ経済発展した、といったことを書いたのですが、こういう日本特殊性論、日本文化論的なことは、富永先生は嫌いだったようです。

②に中心を置いたということで、こちらの分野では、富永先生は実際にフィールド研究、というか調査研究等をなさいました。

レジュメに社会指標研究と書いてありますが、社会指標というのは、先ほども話に出した経済成長とか、GDP だとか、そういうものでは捉えきれないような社会のパフォーマンスというか、「良さ」について、当該社会がどの水準にあるかということをつえようとしたものです。この研究は、あまり経済社会学といういい方はされないかもしれませんが、広義には経済社会学的だと思います。つまり経済指標で捉えきれないような、もう少し幅広い捉え方で社会のあり方がどこまで進んでいるのか、ということをつえようとした指標ということです。

それから、後ほど第 2 部でまた話が出るかと思うのですが、前の郵政省との連係で長いこと貯蓄の研究をされてきました。これも①の線でできればいいのですが、結論的には②について、随分長いことやってきたなという気がいたします。

その②ですが、そもそもなぜ②の研究をするのかというと、経済的パフォーマンスが純粋に経済の中だけで完結できれば何も社会学は必要ないですね。ところが、そこには経済学では取りこぼしてしまうようなことがあり、いろいろなまずいこと、不幸な人が出てきます。それを拾い上げて何とかしていこうというのが、ある意味経済を中心に見たときの社会学の役割で、それは今リベラルといわれているようなものに近いと思うのですが、そういうことをしようという意識がおそらく富永先生にあり、その視点から、だんだん②が中心になっていったということだと思います。

さて、今まで申し上げたのはどちらかというと現場的というか、実証研究的な経済社会学なのですが、実は、本当は富永先生が一番興味もあり、中心になされてきたのは大きな 3 であり、理論的な研究だったように思います。レジュメに文章で書いてありますが、富永先生は方法や視点としての経済社会学、つまり、何かを分析しよう、具体的なものを扱おうというよりも、純理論的な関心が強かったのではないかというふうに思っています。

私が特にそういうことを感じたのは、(ちょっと途中をとばしますが) 最後に出てある講義録『経済と社会』というのを読んでいた時でした。その『経済と社会』という講義録のコピーがここに 있습니다。たぶん 1990 年代後半だったと思うのですが、その講義録の一部を頂戴しました。これを読んで感想聞かせてくれと言って渡され、なかなかお会いする機会がなくて

コメントもせずに終わってしまったものです。この講義録は、実は目次にある予定の 3 分の 1 ぐらいしかいただいていません。その時点では、まだそこまでしか書いてなかったようです。その後書かれたのかどうかはよく分かりません。どこで講義をした時の講義録かについても、聞かないまま終わってしまいました。

富永先生は、かなり昔から亡くなられるまで『経済と社会』という本を書きたくて仕方なかったようですが、この講義録はその本の草稿という意味を兼ねていたようです。

さて、この講義録を見ると、まさに理論的関心が非常に強く感じられます。そこでなさろうとしたことは、レジュメに少し書いてありますが、経済学、特にいわゆる理論経済学と社会学の比較をし、統合を目指すということだったようです。

理論経済学は、ある意味で非常に科学的に洗練されています。数学化されていて非常に体系立っていると言えますね。そういう先進的な経済学理論に対する憧れと好奇心、関心というのが、富永先生には学生時代から強くあったようです。

しかし他方で先生は、経済学より総合的な社会学というものを学び、社会とはもっと幅が広いものだ、いろんなことを取り込んで社会全体を見るべきだという視点を勉強されていました。そしてその社会を分析しようとする意欲、より幅広いことを知っているという自負心があったと思われます。この両方の見方がずっと何十年も富永先生の心の中にあったようです。

そこで両方の勉強をされて、経済学と社会学とは、どこがどう違って、それをどう評価、判定し得るのかということをやっと追求されてきたという気がいたします。それがここに赤字で書いてある、比較社会科学ということなのです。

こういうことをやろうという人は、レジュメにほとんど唯一無二と書いてありますが、極めて珍しいと思います。経済学者はそんなことは絶対、絶対といった語弊があるかもしれませんが、ほとんどやりません。他方、社会学者には、経済学を勉強しようという人がこれまたほとんどいません。

こういう関心のあり方に注目すると、最初私が言った①、つまり経済を社会的に見る、あるいは経済現象を社会的に分析するという「社会学第一主義」が先生の主たる関心であったとは、あまり考えられません。富永先生は、経済学的であっても、社会学に取り入れられるものは取り入れようというような、開かれたと言いますか、公平なと言いますか、そういう立場に立っておられました。富永先生がだいぶお年を召されてからの一つの流行で合理的選択理論というものがありました。合理的選択理論というのは、ほとんど経済学の手法を用いるもので、効用を最大にするという発想で、家族社会学などいろいろな社会学の分野を席卷していきましました。こういったことについても、別にそれはそれでいいではないかという、わりあい公平な気持ちでおられたのではないかと思います。社会学で経済を分析する、経済学で社会を分析するという両方を進めればいい、といった立場でしょう。

最後の講義録『経済と社会』は、完成していたら出版を目指されたと思うのですが、おそらく未完に終わっています。未完に終わったとしても、経済社会学におけるこの仕事の功績は非常に大きいと思います。このような「比較研究としての経済社会学」というタイプの研究については、誰か後を継ぐ人がいればいいのだが、と思われてなりません。

今後こういう分野で、大きなスケールの研究者の現れることを期待しつつ、これにて私の話を終了させていただきたいと思います。

#### ◆徳安彰

間々田先生、どうもありがとうございました。続きまして、友枝敏雄先生にお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

#### ◆友枝敏雄



ただ今、ご紹介頂きました友枝です。今日こういう場で私が話していいのかと迷ったのですが、先生の学恩に報いる意味で、お話をしたいと思います。

私は現在、大阪大学におりますので、塩原勉先生からご連絡いただきまして、「今日の会には行けないけれど、皆さんによりしくお伝えください」ということでした。私が若い時に東洋経済新報社から『基礎社会学』（講座 5 巻本、1980－1981 年）という本が出たのですが、吉田民人先生、安田三郎先生、そして富永健一先生、塩原勉先生という方々が、この講座の編者でした。4 名の編者の先生方は、私を含めて、ここにいらっしゃる今田先生もおそらくそうだと思いますが、若手の社会学研究者にとって、当時とても憧れの的だったということですね。塩原先生は、電話で「僕と一緒に連中は、その多くがもう亡くなったんだよ」とおっしゃっていました。塩原先生とは電話でお話することもでき、88 歳というお年を感じさせない程、現在も頭脳明晰でいらっしゃいます。念のために申し上げますと、4 名の編者のなかでは、安田先生がちょっと年上でして、吉田先生と富永先生が同じ学年で、塩原先生は吉田先生と富永先生より、一つ上ですね。そういう 1930 年前後生まれの人たちが、戦後の社会学を作ってきたということは間違いないだろうと思います。なお私が九州大学でお世話になった鈴木広先生も 1930 年生まれで、4 名の編者と同じ世代です。

私の話として、今日は 3 つのトピックをあげますが、メインは 3 番目のトピックの池辺辺三山です。歴史上の人物である池辺三山について話そうと思います。

盛山先生、それから間々田先生の話とも重なりますが、今日は、富永先生が影響を受けた社会学理論ということで、パーソンズとルーマンを挙げようと思います。まずパーソンズに関しては、先ほどの間々田先生のお話でも言及されたように『経済と社会』という翻訳が、岩波書店から 1958 年に 2 巻本で出ております。古くなりましたけれど、こんな本です。今日は、1 巻のみ持ってきました。私は富永先生の人となりに力点を置いてお話ししたいと思います。僕が言うのもはなはだ失礼ですけど、非常にいい訳だと思います。ただ私はこれを、学部時代に読んだもので、この本のパーソンズの話がよく分からなかったんですね。分からなかったというか、どうしてでこんなことを考えるのだろう、とっていたんですね。先ほどの間々田先生の話に

も出てきたように、私はその後、大学院に上がってから、旧郵政省貯金局で家計の貯蓄行動の調査のお手伝いをしました。この調査をしながら分かったことは、経済学と社会学の違いが分かってくるようになる、パーソンズの『経済と社会』っていう本のすごさが分かる、ということでした。しかしながら、学部四年次には経済学のことをまったく知らないで読んでいました。そのため、こんなことを言って、AGIL4 機能の交換図式のどこが面白いのだろう、と思って読んでいた節がありました。今日は『経済と社会』の内容については、詳しい紹介はしません。

今日お話ししたいのは、3つのエピソードの1番目として、パーソンズが1978年に来日したことです。関西学院大学の社会学部が招聘したということで、関西学院の一つの功績だと思います。パーソンズはその翌年の1979年の5月8日にドイツのミュンヘンで亡くなっています。客死しているんですね。それでお話ししたいことは、当時、私は東京大学文学部の助手で、富永先生の大学院のゼミには出ておりませんが、亡くなった直後の大学院のゼミで、開始の前に、富永先生が「パーソンズに敬意を表して、黙祷を献げよう」とおっしゃったことを聞いて非常に驚いたという思い出です。ゼミが終わって院生の皆さんが帰ってきて、黙祷のことをかなり長くしゃべっていたので、鮮明に記憶に残っています。

それから富永先生に影響を与えた社会学理論のもうひとつはルーマンだろうと思います。これは富永先生がアメリカに行かれた時に、アレキサンダーかどなたかに聞いてこられたんだと、と思いますが、「パーソンズの次はルーマンだよ」っておっしゃっていました。その時は、私は、ルーマンについてはまったく知りませんでした。ルーマンのことを、今日は紹介する時間ありませんが、富永先生は、2008年に『思想としての社会学』という、800ページもある膨大な本を、新曜社から刊行されています。電話帳ぐらいある分厚い本で重いので、今日は大阪からは持って来られませんでした。この本に、1章設けて（第9章）、ルーマンのことが書いてあります。この本では、ヨーロッパの社会学が紹介されていて、サン・シモン、コントからスタートしてルーマンまでいくという構成です。後でお話しますが、これだけの分量を執筆する馬力というか、これにはとにかく感心するというか、すごい先生だなというふうに思いました。この本については、色々なところで書評が出ておりますので、関心がある方はご覧になってください。この本には、いわゆるヨーロッパの社会学者の大物はすべて出てきます。詳しく書きすぎているところがなきにしもあらずと言う人もいますが、これほどすべてに精通している社会学者は、富永先生よりあとの社会学者にはいないのじゃないかなと思っております。

続いて2番目のエピソードとして、富永先生の講義と原稿執筆ということについてお話しします。もうすでに盛山先生のお話のところに出ておりますけれど、私は『社会変動の理論』を読んだ時に、その時はまだ学部生で富永先生の講義を聴いている頃だったのですが、非常に感銘を受けまして、ぜひ指導教員をお願いしようということを勝手に考えていたところがあります。当時は駒場の学部二年の秋で、すでに進学先が決まっておりました。決まった後に、駒場で富永先生の社会学原理という講義がありまして、それを聴きました。その後、本郷に進学してから講義を聴いておりました。こういうことを申し上げるのは失礼なんですけど、先生は、丹念にお話になられるので、講義のノートが取りやすいんですよね。それで非常に感動して、私もああいう考え方だったら頭が働くかなと思いましたし、思考回路についていけるものですから、教えを受けてもいいんじゃないかと思いました。もっとも当時の社会学には頭の回転の早い先生がおられまして、学生に講義ノートを取らせるために授業をされている先生がいまし

た。どう考えても、前の日に授業の準備が間に合わなくなって、自分が翻訳したと思われる、英語の原書の翻訳を棒読みされるんですよ。「君たち分かっているだろう」という感じで棒読みされて、苦勞した思い出があります。その後、自分で講義するようになってはじめて分かったことですが、これは一種の「逃げ」でやっておられたと思うのですけれど、当時は、どんどん自分の翻訳を読んでいかれるものですから、うまくノートを取れなくて苦勞しました。偉い先生なので、分からない学生の方が情けないのだと思っておじけづいたこともあります。

2 番目のエピソードの核心についてお話します。これは、富永先生の文章の素晴らしさということです。後で紹介する池辺三山（富永先生の祖父）の文章も、私が評価するのも失礼ですが、達意の文章です。それから池辺三山について、富永先生と富永先生の叔父さんの池辺一郎という人が書いていますけれど、池辺一郎の文章も素晴らしいですね。そういうことを感じました。それと豪快な執筆ぶりというのは、これは近くにいる人はよくご存知だと思いますが、富永先生は大体、週に二日ぐらい徹夜して原稿を書かれるんですね。こういうことは、私には絶対にできません。徹夜で原稿を書かれた翌日は大学で授業されるのですけれど、夕方 5 時ぐらいになると、完全に睡魔が襲ってきてすぐ家に帰りたという状態になっておられます。助手はそういうときに事務仕事があるもので、当時一緒に助手をしていた渡辺秀樹先生もよくおぼえておられるはずですが、教員（教授・助教授）の OK を取りに行かないといけないのですが、先生の研究室に行った瞬間に「また事務の話か」と嫌な顔をされるのです。しかし、助手も真剣に話して了解を取るということをやっていました。富永先生に、とにかく聞いておいてもらわないと助手の独断専行では決められませんので、それを夕方 4 時から 5 時頃に、研究室に行って先生に話したりしておりましたが、その時に、先生はおっしゃらないのですけれど、昨日は多分、徹夜して原稿書かれたのだなということが分かったことを覚えています。

今日メインでお話するのは、3 番目のエピソードの池辺三山に関することです。本を、ここに持ってきておりますが、こちらがみずず書房から刊行された最初の本『池辺三山』（1989 年）です。それからこちらが中公文庫になっている『池辺三山』（1994 年）です。富永先生の叔父さんの池辺一郎と、富永先生が書いておられます。中公文庫の方は、みずず書房の『池辺三山』に書き加えてありますので、こっちのほうが詳しくなっております。それではなぜ熊本出身の池辺三山を紹介するのかといいますと、実は私の両親が熊本出身でして、私も 4 歳まで熊本にいたということがあります。いつか富永先生に池辺三山のお孫さんであるということを聞いたことがあります。私の助手時代だったと思いますが、家に戻った時に熊本関係の有名人ということで、池辺三山の写真を見ました。今ネットにも出ておりますから見て頂きたいのですけれど、おじいちゃんである池辺三山と富永先生、顔が似ています。僕は見た瞬間、似ているなと思いました。ただ池辺三山は、すごく背が高かったようです。

池辺三山について、簡単に紹介しますが、熊本県出身で、熊本（肥後）の藩士池辺吉十郎の長男です。池辺吉十郎というのが、実は、明治の初期に西南戦争で西郷隆盛の方についているんですね。それで結局捕まって、長崎で打ち首になっております。池辺三山が 13 歳の時に池辺吉十郎は亡くなっています。熊本で聞いていると、池辺吉十郎について悪く言う人はいないです。思いますに、当時の明治維新期の混乱の中で西郷軍につくってというのも、それだけ情がある人だったら、西郷につくだろうという感覚が働いていたのではないのでしょうか。結果的に、歴史的には賊軍になるのですけれど。今言いましたように、13 歳でお父さんを亡くしていますので、池辺三山の文章には、父親のことはあまり出てきません。池辺三山は、1896 年に大阪朝

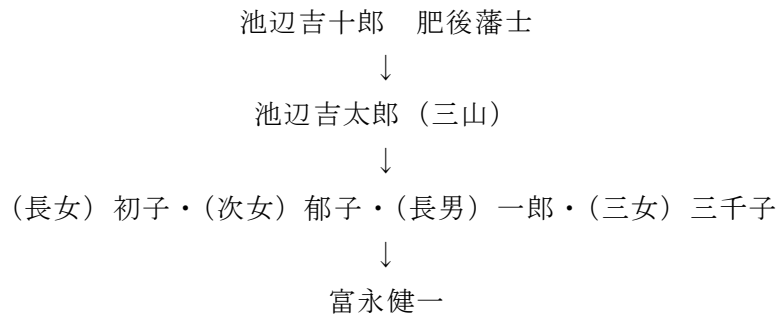
日の主筆に、そして 1897 年から 1911 年まで、東京朝日の主筆になっています。今でいうところの新聞の論説主幹のような職務についているのですが、これだけ長くやっている人は珍しいと言えます。それから新聞社の中で経営者と論説主幹が分かれるっていうのは池辺三山がスタートのようです。それともうひとつは、ここも私には、十分に説明できないのですが、池辺三山は政論のジャーナリストだったのですが、とにかく二葉亭四迷と夏目漱石を朝日新聞に重用したということで、後世、高く評価されているわけですね。とりわけ夏目漱石を厚遇して、当時の朝日新聞の社長より高いぐらいの給料で朝日新聞に招いたということです。ですから、そこから漱石の作品が次々と生み出されてくるわけです。さらにもうひとつ付け足しますと、ご存知だろうと思いますが徳富蘇峰と陸羯南と、それから池辺三山が明治の三大記者というふうに言われています。陸羯南は青森の人です。徳富蘇峰は熊本の人です。

いよいよ 3 番目のエピソードの中身をお話します。日本社会学会史学会の大会が熊本学園大学であった時（2005 年 6 月）に、大会終了後に、（事前に富永先生から電話をもらって）、熊本市にある徳富記念館に行きたいということで、出かけました。徳富記念館というのは徳富蘇峰と徳富蘆花を記念したものです。徳富邸があった所を、地域の自治体に寄付して記念館ができています。なぜ行きたいとおっしゃったのかといえば、池辺三山が徳富蘇峰に送った手紙があるはずだということです。調べてみますと、池辺三山が徳富蘇峰に送った書簡というのは 9 通あるようです。直筆の物が 1 通で、残り 8 通は直筆ではありません。偉くなると、誰かが書いてくれるんですね。直筆は 1 通しかない。それを見に行こうということでした。徳富蘇峰を紹介しておきますが、こちらは熊本の水俣の出身です。歴史的にいうと代官か地主ぐらいの階層の息子です。それで水俣ですから明治の初年に熊本に出てきているわけですね。徳富家が熊本で住んでいた所が今、記念館になっています。ご存知のように徳富蘇峰と蘆花は兄弟です。それで富永先生が「池辺三山が書いた、手紙を見たい」っておっしゃって、「友枝君、一緒に行ってくれないか」っていうことでした。私はもうすでに行ったことがあり、場所も分かっているので、一緒に出かけました。どういう内容の手紙だったのかについては私も忘れてしまっているのですが、記念館には 1 通ありました。

もうひとつは、これは余計なことですけど、熊本から、徳富猪一郎すなわち徳富蘇峰と、それから池辺三山が出ています。徳富猪一郎は、ご覧になると分かりますけど、当時でいうと 6 尺身長があったっていう。180 センチの身長です。私は親族も熊本におりますので、よくわかるのですが、こんなイケメンはいないなっていうくらい、二十歳頃はすごい美男子です。一度ご覧になって下さい。正直に言って、弟の蘆花は全然兄弟とも思えないような顔をしています。ところが不思議なことに晩年になると、兄弟の顔が似てくるんですね。これが、DNA は争えないということでしょうか。とにかくものすごいイケメンなので、徳富蘇峰が嫌だという人も若い時の写真をご覧になって下さい。

ここで家系図を紹介しておきますと、以下のようになります。

### 【池辺三山と富永健一】



三山の次女が郁子さんと言いまして、これが富永先生のお母様です。それからもうひとつ、付け足しのようなこととお話ししておきますけれど、徳富蘆花が、歴史的に言うと 1910 年の大逆事件（幸徳秋水たちが捕まった事件）のあとで、事件で捕まった幸徳秋水の助命を嘆願しています。小説家の徳富蘆花のほう、弟のほう、ジャーナリストの蘇峰ではなくて。どういう経緯で助命を思いついたのか分かりませんが、天皇への助命の嘆願の文章を朝日新聞に載せてくれと、池辺三山に送っているのです。けれどももう時が遅くて無理だったという、こういういきさつがあるわけです。それからもうひとつ、今日は社会学関係の人が多いのでお話ししておきます。実は、徳富蘇峰と関係がある社会学者ということで言えば、大阪大学におられたフランクフルト学派の批判理論の研究で有名な徳永恂先生が、徳富蘇峰と血縁がつながっていて、徳富蘇峰の一族です。

私はたまたま関心があって池辺三山を紹介しました。一郎さんという富永先生の叔父さんは、旧制の麻布中学を出て、その後、旧制高校に行かずに、画家として活動されました。私は、絵の方は分かりませんが、文章は非常に上手な方です。ただかなり自由奔放に書いておられます。池辺三山の書簡が長く紹介されたり、短く紹介されたりといった具合です。ところが富永先生は、やはり学者ですね。非常にきちんと書いてあります。富永先生のものが私にとっては読みやすかったということです。ここまでお話ししてきて思うことは、こういう明治の知識人というのは、先ほどの盛山先生のお話でリベラリズムという言葉が出てきたように、無理矢理、共通項でくくるのはまずいのですが、共通項は一種の欧化主義ですね。欧化主義とナショナリズムの中で、明治から大正期にかけての知識人は生きてきたのではないかなということを感じました。それが富永先生にどこまで引き継がれているかということは別にして、池辺三山を紹介してもいいのではないかなと思って、先生の学恩に報いるという意味で紹介をさせていただきました。

### ◆徳安彰

友枝先生、どうもありがとうございます。

友枝先生のお話を伺いながら、学生の内職よろしく、スマホで池辺三山の写真を探してみたのですが、富永先生に立派な髭を付けると、ちょうど池辺三山の顔になるので、友枝先生のおっしゃる通りでした。

以上で第 1 部は終了となります。2 部では、フロアの皆さま方交えて富永先生の学問やお人柄について、いろいろな思い出を語りたいと思いますが、ここで休憩を入れたいと思います。

## 第2部 富永健一先生の学問と人を語る



### ◆徳安彰

先ほど間々田先生のお話の中にも出てまいりましたけれども、富永先生は旧郵政省の貯金局で貯蓄や保険に関わるリサーチを長らくなさってこられました。本日は、旧郵政省のころの職員でいらした方々、現日本郵政株式会社会長である高橋亨様を始め、何人かの方においていただいております。

間々田先生に最初のイントロをやっていただきたく思います。

### ◆間々田孝夫

もう1回登場させていただきます。先ほど申し上げた通り、富永先生は院生時代、大石泰彦先生に師事していたのですが、20年ぐらいたって、大石先生を始めとする郵政省の研究会に呼ばれることになりました。当時、経済社会学的な研究をしていた私も研究会に呼ばれ、同年代の郵政省の方々とお付き合いをさせていただきました。

本日は、現日本郵便の高橋会長をはじめ、新保さん、浅岡さん、平川さん、織田さんの5名の方にお越しいただいておりますので、思い出話をお願いできればと思います。



### ◆高橋亨

私たちは、ご紹介いただきました旧郵政省——現在は一部が総務省に、一部は日本郵便グループの各社へと、組織としては分かれておりますけれども——で、郵便貯金に関わる調査

研究の仕事をしておりました。かつて郵便貯金というと、もっぱら商売上の争いのような議論が多く、経済、金融、財政のそれぞれで、いろいろと論争があったのですが、昭和 51 年ぐらいから「そういうことを繰り返していても、一面しか議論できないのではないか」ということになり、幅広く分析をしていただこうということで、富永先生にも調査研究に加わっていただいた経緯があります。先生に入っていただくことで、議論が構造的になり、深みのあるものになったと感謝しております。

今日集まったのはその当初のメンバーですが、これから、携わった順に話をしていただきたいと思います。では、まず新保さん。

#### ◆新保智

新保と申します。ただ今お話がありましたように、郵便貯金についての調査研究会を始めよという話があって、準備の段階から携わりました。当時、郵便貯金の残高が顕著に増えだしました。研究会を立ち上げたのは昭和 51 年だったと思いますが、当時は、郵便貯金に関して否定的な議論が多かったこともあり、自分たちでもきちんと勉強してみようということになって、調査研究会を作ることになりました。では、どなたに参加をお願いするか。最初は、経済や金融の専門の先生にお願いしようということになり、先ほどからお名前が出ている大石先生にお願いすることになりました。あと何人か経済や金融の専門家にお願いする案を作ったのですが、「経済とか金融だけじゃ駄目だろう」ということになった。「郵便貯金は非経済的な面での役割や意義があるのではないか」というわけですね。

では、誰がよいかということで、いろいろ探しまして、そうしたら、当時社会学で活躍されておられた富永先生を探し当て、お願いしたら快く引き受けていただきました。先ほどの間々田先生の話では、富永先生も当時、こうしたことに関心をお持ちだったようです。富永先生ばかりか、間々田先生や友枝先生からもご指導をいただき、金融だけではなく、他の分野からも注目された調査研究になったのではないかと、今振り返って思います。

会の冒頭で富永先生の写真が掲げられましたが、先生は当時も、いつもにこやかな表情されておられました。颯爽として、カッコいい先生だった印象を持っています。

#### ◆浅岡徹

浅岡と申します。新保さんが説明された調査研究会の事務局を担当しておりました。

当時、貯金局の中に経営企画室という部門があり、そこに配属になりました。事務局は、調査研究会を実施するための討議案を作らなければならなかったのですが、郵便貯金に関する調査研究会にデータを提供することもあり、私たちの部署が担当となりました。郵便貯金に関する、今でいう市場調査の担当といったらよいのでしょうか。データを提供して、先生方にその結果の分析をしていただいたのですが、我々がそのチェックを行うことになるのかなと思いきや、研究の手助けをしていただくという趣旨で当時、研究補助員という制度を設け、そういった方々にも研究会にお越しいただこうということになりました。間々田さんや友枝さんは、その研究補助員ということになります。

間々田さんにご参加いただいたおかげで、東大の大型コンピューターを使わせていただくことができました。分析結果をプリントアウトしては、これをグラフにして検討するといった作業をし、報告書にまとめたことを覚えております。富永先生は、間々田さんや友枝さんより

上におられるので、あまりお話しする機会はなかったのですが、その後も、年賀状のやりとりだけはさせていただきました。年賀状には、「来年こんな論文を完成させたい」というようなことを書いておられ、エネルギッシュな先生だなといった印象を持っています。

その意味でも、本日のこの会にお呼びいただいたことを、大変うれしく思っています。すでに年金生活に入っていますが、久しぶりに間々田さん、友枝さんに会えたのは何よりでした。

では、次。

#### ◆平川本雄

平川と申します。今、調査研究会の話がありましたけども、調査研究会の発足にともない郵政省の中にプロジェクトチームができて、私は富永先生の担当でした。

先生のご自宅にも伺ったこともありますが、当時、頻繁に打ち合わせをやっていました。当時の先生のことは鮮明に覚えているのですが、春夏秋冬、打ち合わせの際に、先生は背広を脱いで、ワイシャツの腕まくりをされるのですね。豪快という言葉スマートに表現しようとするとうなるのかわかりませんが、とにかく豪快。勢いがある、その姿に圧倒されながら打ち合わせをしておりましたので、先生の印象は強烈に残っています。

それから、横道にそれるかもしれませんが、平成になって、先生から「とてもおいしくいただきました」という手紙を頂いたことがあります。以前、先生にお手紙を出したことがあるのですが、先生は福武先生との関係で、大学院時代に、農村社会学の関係で秋田に何日間か滞在したことがあると伺っておりました。そこで先生に、秋田の農家の野菜を送ったのですね。山菜も入れました。

送る時に、「東京大学の先生に、こんな物を送っていいのか」と言われたのですが、「いや、先生はきっと喜んでくれるから大丈夫だ」と言って、先生が滞在された秋田の農家が作った野菜や、採った山菜をお送りしました。これに対して、「ありがとう、おいしくいただきました」というメッセージを先生からいただいたのです。

そんなことも先生との出会いの中であったことを、ご報告させていただきます。

#### ◆織田善則

織田と申します。富永先生との出会いは昭和 55 年ですから、1980 年ですか。先ほどから出ております、郵便貯金に関する調査研究会の、富永グループといいますか、先ほどからお名前が出ています間々田先生、友枝先生、それに高瀬先生、徳安先生にご参加いただきました。その関係で、東大の研究室にもお邪魔させていただいたこともあります。

研究会のほうは 5、6 年担当させていただいて、その後異動になったのですが、富永先生が慶応の方に異動された後、小田急で何回か一緒にすることがありました。当時の話だけでなく、これからの話とか、いろいろ伺う機会があり、それが懐かしい思い出となっております。

私もすでに退職し、某財団に移っておりますが、富永先生が手掛けられたアンケートは今後とも継続していくべきではないかといった話があり、平成 23 年から財団のほうで、貯蓄行動に関するアンケート調査を隔年で実施しております。先生には昭和 55 年からいろいろ教えていただきましたが、先生がおっしゃる実証と理論の融合とは今でも生きている。よりよい社会を作るための調査分析は必要だなと感じています。

どうもありがとうございます。

◆徳安彰

お話ありがとうございます。それでは高橋さん、最後に。

◆高橋亨



今、改めて富永先生にお世話になったことをどう考えたらよいか、そんな思いで、メンバーの発言を聞いておりました。

先ほど話にもありましたように、当時、日本の貯蓄率はどうしてこんなに高いのかというのがもっぱらの話題でした。そして、明治以来長年培った、人々の意識なり行動に鍵があるはずだということで、間々田先生や友枝先生と社会調査を積み重ねてきたわけです。定期的に調査を行い、その変化を調べてみる、ということをやってきたのですね。ところが、当時高かった日本の貯蓄率も、その後ほぼ0になっています。

当時の議論の中心は自助。国民にずっと自助努力の重要さを啓発してきた中で、貯蓄率が高かったのだろーと思います。ところが今では、家族機能の低下や地域社会の活力低下で、加えて、公助が難しい中で、あらためて自助努力が謳われるようになっており、これから先、自助をどのように伸ばしていけるのかと感じています。

貯蓄行動に限らず経済的行動といわれるものであっても、経済的な要因だけで解明できないものが結構あると思います。今の日本ではキャッシュレス化が進まず、現金信仰が強く見られますが、その背後に何かあるのではないかという気もしています。

研究会には金融、経済、財政等々、多分野の先生方にご参加いただきましたが、富永先生は、発言の回数や量では負けていなかった。自分の領域ばかりか、他の方の領域でも議論をしていく。そういう意味では、知的な関心領域の広い、コミュニケーション能力の高い先生だったと思います。学術的な議論だけでなく、その後飲み会をやっているときも、ほぼ同じような傾向でなかったかと思います。

今田先生始め、今日お集まりの皆さま方に感謝を申し上げます。どうもありがとうございました。

◆徳安彰

ありがとうございました。富永先生は上廣倫理財団とのタイアップで、いろんな活動をなさってられました。東大を退官された後は、上廣が先生の拠点の一つになっていた時期もある

と承知しております。本日は事務局長の丸山登様、それから同じく事務局の小野塚様がおいでですので、上廣倫理財団での富永先生のご活動などについてご紹介いただければと思います。

#### ◆丸山登



【発言者のご意向により、発言内容は省略します】

#### ◆小野塚久輝様

【発言者のご意向により、発言内容は省略します】

#### ◆徳安彰

丸山様、小野塚様、どうもありがとうございました。

富永先生はいろいろな場所で活躍されましたが、これには海外も含まれます。1980年代に南開大学に講義をしに出掛けられ、中国にも多くの教え子がおられて、亡くなられた時にもいろいろなメッセージが寄せられました。

当時大学院生で中国での講義の際にアテンドをし、現在、東京大学の教授になっている園田茂人さんが、いろいろなエピソードをご紹介していただけるということですので、一つよろしく願いいたします。

#### ◆園田茂人



ただ今ご紹介にあずかりました、園田と申します。同じ東京大学でも、私のオフィスはここ

からちょっと外れた、懷徳館という庭園の近くにあります。

先ほど上廣の方からもご説明がありましたけれども、富永先生ご自身が 2011 年にミネルヴァ書房から『社会学 わが生涯』という分厚い本をお書きになり、その第 8 章「中国語ができない私の中国経験」で、ご自身の経験を語っておられます。ですので、詳細はそちらをご覧ください、ここでは、執筆後に起こったことなどを含めて、皆さまにご報告できればと思っています。先ほど徳安先生からご説明がありましたけれども、富永先生がお亡くなりになったという情報をもらって私ができることは何かと思い、1984 年に富永先生の授業を聞いた学生、おおよそ 30 人が WeChat——中国では「微信」といいます——で繋がっていますので、「富永先生がお亡くなりになった」と発信したところ、蜂の巣をつついたような状態になりました。いろいろなやり取りが起り、2 日後には南開大学社会学系の関信平君がとりまとめて、「葬儀委員会に渡してほしい」と弔問用の文章を送ってきました。

とはいえ葬儀委員会はありませんでしたし、書かれた文章を誰にどういう形でお伝えしたらいいのかわかりませんでしたので、私の方で引き取っておりました。今日こういう形で機会を頂きましたので、ここでご披露したいのですが、その前に、先生が中国に行かれたことが、どのような意味をもっていたかを、簡単にご紹介したいと思います。

先ほど間々田先生が、『経済と社会』の草稿があるとおっしゃいましたが、その一部は 84 年の南開大学での講義の時に書かれていたものではないかと思っています。先ほど「準社会」という概念が紹介されましたが、その時の私との会話の中で初めて「準社会」が語られたのではないかと思います。「社会学者の僕が市場を研究するのだから、社会じゃないわけがない。でも社会のように定常的な関係性をもつわけでもない。市場を表現する何かうまい言葉ないか」みたいなやりとりをさせていただいた記憶があります。

また先生はよく「大学の教員をやっている、中国の時が一番楽しかった」とおっしゃっていました。「どうしてですか」と聞くと、「だって、東大生なんて生意気な奴ばかりじゃないか。それに比べて南開の学生は、みんな先生、先生って慕ってくれて、こんなに楽しいことはなかった」というのです。

実際、中国の社会学会を長く牽引されてきた、今は亡き陸学芸という研究者は 1984 年入学組のことを「黄埔軍官学校の学生」と評しておられました。黄埔軍官学校というのは、蒋介石が校長だった軍人養成学校ですが、国民党ばかりではなくて共産党の軍の幹部も学んだ場所です。要するに、今の中国の社会学の中核的な人物がみなそこにいた、というわけですね。

この 84 年入学組が現在、どうなっているかを知っていただくために、あとでご紹介する 2 名を除き、恣意的にはありますが、お手元の資料に 6 名の名前と写真、所属を書き出しています。

関信平君と、右上にある張文宏君の 2 人とは、1 週間ほど前に上海で会っています。日本社会学会と中国社会学会の交流協定を更新するために上海大学に行ったところ、彼らが現在、中国社会学会の副会長として活躍していることを知ったのです。みな、しっかり中国の社会学界の屋台骨を支えています。

関信平（南開大学教授、  
中国社会学学会副会長）



周曉虹（南京大学教授、  
長江学者）



張文宏（上海大学教授、  
中国社会学学会副会長）



胡荣（アモイ大学教授、  
閩江学者）



于顯洋（中国人民大学  
教授、



李文（中国社会科学院  
亚太研究所服研究院）



さて、その関信平君が中心となって書いた弔問用の文章を、読み上げさせていただきます。

「私たちが敬愛する、東京大学名誉教授の富永健一教授が逝去された知らせを聞き、深い悲しみに襲われています。富永先生は 1984 年に初めて、南開大学社会学系に来校され、経済社会学——そうです、授業は経済社会学という名前で開講されておりました——を講義されました。たった 2 カ月の間でしたが、富永先生は私たちに多くの社会学理論の知識を伝授されました。私たちも先生から大いに学び、その後の社会学研究の基礎を作ることとなりました。富永先生は該博な知識を持たれ、熱心に講義くださいました。またご人徳も備え、私たち学生を迎え入れてくださいました。」

少し注釈を加えます。

富永先生は 1984 年 11 月初旬から 12 月の中旬まで、専家楼（専門家専用の宿舎）といわれる所に住んでおられました。朝 8 時から講義が始まり、12 時に終了。昼食を食べて、少しゆっくりしてから、翌日の講義録を準備する。先生は鉛筆で講義録を作成され、これを通訳の方と私に渡し、私の方はサマリーを中国語訳してワープロで文書を作り、翌日の授業に備える、といった毎日でした。

夕食後ともなると、先生もお疲れになっているはずなのですが、当時の学生たちは知識に飢えておりまして、授業と関係あることないこと、先生の部屋にストームをかけては質問攻めにしました。「日本の経済成長はどうして起こったのか」といった、回答するのが、あるいは説明するのが難しいことも、先生にガツガツ聞いてくる。友枝先生のお話だと、富永先生は徹夜明けだと不機嫌になられるようですが、当時の富永先生は気力充実しておられて、どんな質問にも一生懸命にお答えになる。というわけで、「学生を迎え入れた」というより、彼らが勝手にやってきたというのが現実に近いのですね。

続けます。

「後に富永先生は南開大学の兼任教授となられ、社会学系の発展に重要な貢献をされました。私たちは、先生のお力添えに心から感謝しています。ここに追悼の念を表します。富永先生、私たちは先生を永遠に忘れません。そして、安らかにお眠りください。」

南開大学の学生、特に 84 年組が先生を慕うのはよいのですが、後に彼らが東京にやってくるたびに、「富永先生に会わせてくれ。そのためのアレンジをしてくれ」といったリクエストがやってきたのには辟易しました。実際、先生の体調を慮り、その多くを握りつぶしてきたのですが、2017 年の夏ばかりは「一肌脱いだ方がよいのかな」と思う機会がございました。

84 年組で一組カップルが誕生しているのですが、奥さまは張静といい、現在北京大の社会学系主任をしています。旦那さんは景躍進といい、社会学を専攻した後に政治学へと転向し、現在、清華大学政治学系教授をされているのですが、この 2 人が筑波大学にやって来るので、富永先生との面会をアレンジしてほしいと言ってきたのです。麻衣子さんにもご相談し、先生のご意向次第ということだったのですが、先生が快諾されて、東文研の私のオフィスにお越しいただき、面会がセットされることになりました。そこで撮った 写真が、以下の 2 葉です。



左側の写真では、富永先生がにこにこ笑っておられて、張静が PC の画面を見せていますね。画面には、84 年当時の写真がスキャンされて映されており、これを眺めては昔を懐かしみ、お笑いになっているのです。面会は全部で 1 時間半ぐらいだったのですが、1 時間くらいはこうした、たわいもない話をしました。ところが富永先生、ゴクリとお茶を飲んだ後で、「これから」といった感じで、ゼミのような雰囲気になりました。

で何をおっしゃったかというところ、「あの 2005 年の反日デモ、どうして起こったの」と聞かれるのです。通常、日中関係の機微がわかっている方だと、そうした直截な質問はしないのですが、先生はストレートに聞かれる。そうすると、2 人はたじろぎながらも、イロイロと説明するのですが、先生は質問をやめない。

一部ミネルヴァの本の中にも書かれていますが、先生が中国におられたときに発生した 1989 年の学生運動を引き合いに出しつつ、「なんで共産党は学生運動を潰したのか」とたたみかける。写真の 2 人は、中国でもリベラルな方で、こうした質問を受けるのは辛いはずなのですが、じっと耐えつつ、それなりに答えようとする。こうしたやり取りが 30 分ほど続き、右側にある記念写真を撮って、面会は終了しました。

今日はこれを一番お伝えしたくてこちらにやって来たのですが、富永先生は面会の最後に、

かすれる声を絞りだして、「中国は今、右肩上がりでもいいかもしれないけれど、これで人々、とりわけ軍が傲慢になると、戦前の日本と同じようことが起こってしまうかもしれない。君らは知識人として、こうしたことにならないよう、努力しないとイケない」とおっしゃいました。

先生の学問的な特徴をめぐっては、いろいろな議論があるのですが、この発言こそ、モダニストとしての富永先生を象徴する、私たちへの遺言のように思われます。このエピソードをご紹介します、富永先生への感謝の気持ちと敬愛の念を表したいと思います。

ご静聴ありがとうございました。

#### ◆徳安彰

社会学から離れたところも含め、お話をいただきましたが、既に何人かの先生から「一言話をしたい」というお申し出を受けております。われもわれもと、手を上げられると収拾がつかなくなって大変なので、事前にお声がけいただいた先生にマイクをお返ししたいと思います。まず田野崎昭夫先生、一言よろしいでしょうか。

#### ◆田野崎昭夫



どうも。紹介いただきました田野崎です。私、長く中央大学におりましたので、その立場から少しお話し申し上げたいと思います。

私がパーソンズの戦後の理論研究を卒業論文で本格的に取り上げたこともあり、これを評価してくださった早稲田大学の武田良三さんが、関東社会学会でパーソンズのシンポジウムを開くというので、これに呼ばれたときに、初めて富永健一さんとお会いしています。会場は慶応大学でしたが、発表者に富永さんや塩入勉（山梨大学）さんがいらっしゃいました。

富永さんのお父さんは、理論の理と書いてどういうふうに読むのかわかりませんが、その方は戦前、東大の新人会員で、満州の建国大学で哲学の先生をされていました。戦後日本に戻り、一時松本深志高で教えておられたのですが、その時の教え子の一人が、中央大学に入ってきて言うには、お父様が「自分の息子は東京大学で教えていて、すごくうれしい」とおっしゃっていたとのこと。富永さんは非常に親孝行なんだなと思いましたね。

富永健一さんは確か、戦争中は広島陸軍幼年学校の生徒だったと思います。ただ原爆投下の時には広島市におらず、命拾いをしたようです。

友枝敏雄さんや、今話をされた園田茂人さんが中央大学に着任された際には、「よろしく」と個人的な手紙を送ってこられるなど、非常に弟子思いです。中央大学にその時おった宇津

栄祐さんなんかは、当時はやった歌をもじって、富永さんのことを「おトミさん」と、親しみをもって呼んでおられたことが思い出されます。

その後、パーソンズ研究を介して富永健一さんとは懇意になったのですが、パーソンズの生誕100周年記念の催しがあつて、その時にもいろいろと話をさせていただきました。その際、翻訳権の問題があつたが、私が尽力して、何とか間に合つて無事100年記念のシンポジウムをすることができました。そのあたりのいきさつは他のところで書いたもので、そちらをご覧くださいいただければと思います。

ここでは、(1994年に)ドイツのビーレフェルトで国際社会学会が開かれた時のエピソードを紹介したいと思います。参加された方はご存じかもしれませんが、バスツアーに参加した際、富永健一さんが発車時刻にずっと遠くのほうに行っておられて、遅れて来たことがありました。その時に奥さん——英子（ひでこ）さんとおっしゃいましたか——、非常に怒りまして、直立不動の富永健一さんを叱責されるのですね。これは厳しいなど。

大会が終わり、バスで東欧のほうを回ることになったのですが、バスに乗り込んだ後、奥様が貴重品をお忘れになったことに気づき、急きょバスを降りられました。その後、合流することができたのですが、そういうこともあつて、奥さまの態度が少し穏やかになって、よかったなと思いました。

プラハやウィーンにも行きましたが、ウィーンの宮殿の野外劇場で、『フィガロの結婚』というオペラが上演されていました。私と家内と富永夫妻と隣り合つて観たのですが、今ではそんなことも懐かしく思い出されます。

以上で私の話は終わりです。ありがとうございました。

#### ◆徳安彰

田野崎先生、どうもありがとうございました。続きましてもうひとかた、庄司興吉先生、よろしくお願いいたします。

#### ◆庄司興吉



庄司興吉でございます。私は富永先生のちょうど10年後輩にあたります。今日は富永先生について皆さんの話を伺えればいいと思って来たのですが、「話したいことがあれば」という申し出がありましたので、他の先生方とは全然違った話になるだろうと思いますが、引き受けさせていただきました。

私は、富永先生が 1962 年に東京大学でゼミを始められた——この時に授業も同時に始められました——、その時の最初のゼミ生です。そのことは富永先生、よく覚えてらっしゃって、その後もしばしば、そういうことをおっしゃっておられました。ただ専門のゼミは、他の先生のところに行きました。それから大学院に進んで一度法政大学に出て、それからここにまた戻ってきたのが 1978 年です。その間に、自分の研究を進めるために、1970 年代にソ連、東欧を 2 回ばかり、それぞれ 2 か月くらいかけて、苦勞しながら旅行しました。その後アメリカも経験しないと駄目だと思ったものですから、アメリカに行きまして、そこで 2 年ほど滞在して、東大に戻ってきました。富永先生が定年になられたのが確か 1992 年だったと思いますので、14、5 年ご一緒させていただいたこととなります。

着任した当時、社会学研究室のある部屋で研究室会議を行っていましたが、この建物の内側に面した部屋で、窓から赤レンガ造りの壁が見えるような作りでした。この部屋について「和辻哲郎先生が、『まるでアウシュヴィッツのようだ』とおっしゃった」という話を富永先生がなされたことがあります。アウシュヴィッツは現在のポーランドにあるのですが、私は 1971 年にポーランドを訪問した際にアウシュヴィッツに行ったことがあったので、何気なく「行ったことがあります」と言ったところ、富永先生がすごくびっくりされました。当時はまだ、アウシュヴィッツに行く日本人は少なかったもので、びっくりされたのでしょうね。

私も富永ゼミの最初の学生の一人ですから、富永先生がその後おだしになった『社会変動の理論』を勉強させていただきながら、「こういう視角で社会変動は捉えられるのだろうか」などと思いつつ、ソ連・東欧やアメリカで学んできました。

この間、富永先生がおやりになったことについては、富永先生の薫陶を受けられた皆さんがお話になりましたから、私からは何も申し上げませんが、私の印象としてより強く残っていることが 2 つあり、そのことに関連する話が今日、予想以上に出てきて、大変喜んでるところです。

その 1 つは、今年がちょうど 30 年目にあたりますが、中国で起こった天安門事件に関するものです。この事件の全容についてはよくわかってないものの、当時、学生や若い人たちの間に民主化要求が高まって、それをどうするかという問題になりました。私はもちろん、民主化要求を中国政府が受け入れることを期待していたのですが、その動きが武力で押さえつけられてしまった。この事件の直後に、富永先生が「ああいうことは、そんな簡単にはいかない」という趣旨のことをおっしゃっていた記憶があります。

この事件は 1989 年の 6 月に起こったので、その後 1 年もしないでソ連・東欧で大変動が起こったこととなります。米ソ冷戦が終結したのはいいものの、ソ連・東ヨーロッパが従来の体制を維持できなくなり、最初に東ヨーロッパの諸国が崩壊する。そしてついにソ連までが崩壊してしまったのです。

2 番目は、この件に関する富永先生の感想なのですが、「ソ連のような、何十年もたった大きな社会が、まさか崩壊するとは思わなかった」と率直におっしゃったことが、今でも記憶に残っています。だとすれば、これらの出来事をどのように理解したらよいか。私なりにいろいろと考えてきたつもりですが、（今日の会で）富永先生が中国に行って講義されたり、それから中国の人を迎え入れて話をされたりといった話が出て、大変参考になりました。

現在、ヨーロッパやアメリカ、日本と作り上げてきた市民社会、およびそれを中心にした世界秩序が明らかに維持しにくくなっている。これに代わって台頭してきているのが中国で

す。富永先生の理論を単純に解釈すると、産業化することで社会が変わるということなのでしょうが、どうも中国の根っこには市民社会がなさそうです。何千年も農民社会で、アジア的経済とかアジア的生産様式といわれてきた社会が根本的に変わってきていることを、どのように捉えたらよいか。私は富永先生にも学びながら、何とかしなくてはいけないと思っています。

私たちが学生の頃は「アメリカンドリーム」という言葉を聞かされてきたのですが、今は中国が「中国の夢」と言い始めている。人類は運命共同体で、その中でわれわれは中国の夢を実現していくのだと言い出し始めているのですよね。でも、これをどう理解したらいいのか。富永先生のいろいろな業績を学ばせていただきながら、社会学としてどのように解いていくのか、これから考えていかねばならないと思っています。

そういうことを富永先生に対する追悼として、皆さまにお伝えしようと思って、こちらに参りました。どうもありがとうございました。

#### ◆徳安彰

庄司先生、どうもありがとうございました。

富永先生は、東京大学を退官の後、慶応大学で教鞭を執られました。その時に教えを受けた方も何人か会場にいらしていますが、今日は廣瀬毅士さんに慶応時代の富永先生のお話をご紹介します。よろしくお願いいたします。

#### ◆廣瀬毅士



ご紹介にあずかりました東京通信大学の廣瀬です。今ご紹介の通り私は富永先生が慶應大学に移られてからの教え子です。先生は東大を退官されてから来られましたので結構歳も離れていましたし、私自身は修士課程までのご指導を頂きましたので、今まで話してこられた皆さんのように丁々発止の知的格闘をしたというような関係ではなかったと思うんですけれども。

先生は東大退官後の5年間で慶應で過ごされました。三田キャンパスの方の大学院でもゼミを持たれていたんですけれども、富永先生の所属は藤沢キャンパスの環境情報学部でした。藤沢では最終的に2つゼミがありまして、ひとつのゼミは理論研究でルーマンを読んでいた。もうひとつのゼミではSSMデータの二次分析をやりました。

私が初めて富永先生にお目にかかったのは、私が学部3年生のとき（1992年）に富永先生が着任された初日です。ご挨拶に研究室に伺ったんですけども、「君、ゼミで何やりたいの」っ

て言われました。シラバスには理論研究をやると書いてありましたし、私はやはり富永先生といえば『社会学原理』などの理論研究のイメージでしたし、近代化論や社会システム理論などを学びたいと話した記憶があります。富永先生はずっと微笑んで聞いてらっしゃったんですが、ふと途中で話を止めて、「それは分かった。いま君の顔を見て思い付いたんだけど、計量研究をやろう」と言われまして。

「何ですか」と聞くと、「君、そういうの好きそうな顔をしてるから」って言われたんです。「顔ですか？」って不思議な気持ちでした。ただ当時の私は「統計学は得意じゃないんです」って話をしたんですが、先生は「得意じゃないなら勉強すればいいじゃないか」と仰るんです。「社会学については教えるけど、統計学については僕が教えるんじゃない。僕と君が一緒に、競争して勉強するんだよ」というわけですね。ゼミでの研究ってそういうものなのかって妙に納得した覚えがあります。

結局ゼミ生は一人で、きついゼミになりました。毎回英語文献の何十ページ分かを要約しなさいって割り当てられるので難色を示したら、「君、中学 1 年から英語やってるんだろ。できないわけ、ないだろう」って言われて。英語そのものよりも、中に書いてある社会階層論や統計学の用語がまだよく分からなかったのも、いろいろ困った覚えがあります。また、ゼミが始まった当初の半期のうちに「君、クロス表の対数線型モデル（ログリニアモデル）ってのがあるからちょっと勉強してマスターしといて」って言われたんです。先生は簡単に仰ったんですけども、調べてみたら当時の私の初歩的な統計学知識では全然手に負えない内容でした。当時の私のいた大学には統計学が専門の先生がいらっしゃいましたので、そのゼミにも入れて頂いて教えて頂いた覚えがあります。

ゼミの最初の半期が終わるころには何とか専門論文も読めるようになってきました。そのころ富永先生に、「結局なぜ私に計量をやらせたんですか。なぜゼミを計量に切り替えたんですか」って聞いたんですけども、それに対して富永先生は「僕には反駁しなきゃいけないことがある」って仰いました。はっきりとしたワーディングは覚えてないんですけど、具体的にある研究者の名前を出されて、とにかく反論したい論点があると。「理論研究の本を出すにあたって、しばらく計量のことをやってない間に立ち遅れてしまった。だから僕はそれに反駁しないといけない」って言われたんです。「ただ、自分が知っている古い手法で反駁しても意味ないから、彼らが使ってる手法で同じ分析をやってみせた上で反論しないといけない」と。その手法というのがログリニアモデルだったというわけなんです。

さらに先生は、「僕は変わらなきゃいけないんです」って仰ったんです。「新しい場所に来たんだから、新しいことをやって新しいことを覚える。だからコンピューターもプログラミングもデータ分析も、君の知っていることは全部教えてくれ」って仰ったんですね。

当時の大学（慶應藤沢キャンパス）にあった分析ツールは SAS でも SPSS でもなくて、今の R の元になった S 言語っていうものだったんですけど、ある日私がその S 言語でデータ分析をしていたら、富永先生が「それ何だい？ 僕もやりたい」って仰ってですね。私は「S 言語っていうんですけど、富永先生は別にもうよろしいんじゃないですか」って返事したんですが、言いたかったのは《富永先生みたいなもう大ベテランの先生が今さらプログラミング言語を新たに覚えなくてもいいですよ》という意味だったんです。でも、先生は「君は僕を馬鹿にするのかい？」って仰ったんです。「自分の教え子が知ってることを自分が知らないなんて、僕は許せないんだ」っていうことで、それから毎週二人でさらに S 言語勉強会のサブゼミをやるこ

とになりました。

富永先生は S 言語をマスターされて、安田指数を計算する関数を作成なさったりした覚えがあります。さらに文書整形 LaTeX ってシステムもだいぶ覚えられまして、S 言語で分析した論文を LaTeX で整形するという、今の若い院生並みのコンピュータースキルを 60 歳過ぎてから身につけられたんですね。ということで、「変わらなきゃいけない」と仰った通り、見事にプログラミング言語から何から身につけられたんですね。かつて先生の奥さまがよく仰ってたんですけど、慶應に来られてからの先生は、東大におられた頃とは院生や学生との関わり方や、表情も一変されたということなんですね。

いろいろ思い出はありますので一個一個語っていくときりがありませんけど、ISA に持っていくフルペーパーがまだできてないということで、夜中の 2 時から成田空港に出発する直前まで、研究室で一緒にデータ分析をして LaTeX で整形して印刷して…とお手伝いをした覚えがあります。お互いにだんだん遠慮がなくなってきた、「僕は今までのお弟子さんの中で、君が一番いやなんだよ」なんて仰ることもありました。ただそう言いつつ、「でもここに来てから僕は楽しいことばかりなんだよ」って仰ったので、非常に嬉しい思い出もしたことがあります。

多くの皆さんにとってはおそらく、東大教授としての富永健一先生のことしかご存じないと思いますので、それからの富永健一先生がどのように慶應で過ごされたのかということを知って頂く一助となればよかったと思います。以上、私の知っている富永先生のエピソードでした。

#### ◆徳安彰

廣瀬さん、どうもありがとうございました。私もそのころ、半年ほど藤沢にお邪魔したことがあるのですが、当時藤沢のコンピューター・システムは、日本の大学で最先端だと言われていました。その藤沢で、富永先生が S 言語までやっておられたとは存じ上げませんでした。

最後に、新宿高校で同級生だった吉原健二様、後藤澤之助様から「最後に一言お話をしたい」とのことですので、よろしくお願いいたします。

#### ◆吉原健二



富永君とは新宿高校で一緒でした。私が新宿高校におりましたのは終戦直後の制度の切替時で、都立六中時代から 6 年間新宿高校におりました。富永君は六中の 1 年生の時に確か満州から転校してきたのですが、それから 5 年程新宿高校で一緒に仲が良かったんです。

富永君は、転校生ですけど新宿高校を愛してしまっていて、同窓会には必ず出席し、「この学

校 はいい友達も多く、良かった。私の今日があるのは新宿高校のお蔭だ」ということをよく言っていました。

今年の 2 月に同窓会で会ったのが最後になりましたが、そのときはまだ元気で、亡くなったという知らせを聞いて本当にびっくりしました。

亡くなった知らせを聞いてすぐにお葬式に行きました。大勢の方が見えていましたが、新宿高校の卒業生は私だけでちょっと寂しい思いがしました。しかし富永君のことだから、いずれ「偲ぶ会」のようなものがあるのだろう、それには必ず出てみようと思っていましたところ、今日の御案内をいただきました。

富永君は、人柄が良かったですね。学問的業績のことはあまり知りませんでしたが、今日の皆さんのお話を聞いて感心しました。そしてもうちょっと長く生きてほしかった、そんなに早く逝かないでよかったのという思いで一杯です。

私は富永君と一緒に東大に入学し、卒業して厚生省に入り、公務員になり、昭和の終わりに退官したんです。退官してから新宿高校時代に仲が良かった五、六人で時々会おうということになり、年に二、三度学士会館で一緒に食事をしたり、京都に夫婦同伴で旅行したりしました。富永君の奥さんもいい人で、そのとき奥さんはいろいろな話のあとで「終わり良ければ全てよし」ですね、というようなことをおっしゃっていました。おそらくそれまで仕事のこととか家庭のことでいろいろご苦労があったかも知れませんが、いまの幸せを喜んでおられたように思います。

今はそうでもないですが、当時の新宿高校は有名校で、東大にも沢山入り、東大に残って学者になった者も沢山いました。富永君は文学部ですが、工学部、法学部にも有名な学者になった者がいます。厚生省にいるときは学者の先生にもお世話になりました。経済学者の有沢広巳さん、それから社会学では、福武直さんにお世話になりました。富永君には残念ながらそのような機会はなかったです。

日本の社会も昭和から平成へと大きく変わりましたが、これを社会的にみるとどう変わったのか、その背景、原因は何か、そしてこれからの日本はどうなるのか一度富永君に聞いてみたいと思っていたのですが、それは無理になりました。本当に残念ですが、今日こういうご案内を頂いて有り難うございました。とりとめのない話になりましたが、お許し下さい。

#### ◆後藤澤之助



昭和 20 年に戦争が終わって、その年の秋に富永君が満州から、苦勞して引きあげて、クラ

スに編入してきたのですね。当時、幼年学校の制服を着て学校に通っていたのですが、お父さんが長いことシベリア抑留されていて、3年生か4年生の時かな、朝礼で「おやじがやっと帰ってきた」と、うれしそうな顔で報告しました。その後もいろんな思い出がありますが、富永君の、あのうれしそうな顔は、今でも覚えています。

他にもいっぱい思い出がありますが、本日はありがとうございました。

#### ◆徳安彰

ありがとうございました。

最後に「御遺族挨拶」ということで、お嬢さまの麻衣子さんにあいさつをお願いしていたのですが、直近になりまして体調を崩されたということで、本日は残念ながらお見えになることができず、「皆さまにくれぐれもよろしくお伝えください」ということでした。

御遺族の代わりとはいきませんが、葬儀の際に喪主の麻衣子さんがお話しされたことなどを含めて、田中秀隆さんからから、少しご紹介をさせていただきたいと思います。

#### ◆田中秀隆



突然のことで皆様を驚かせて申し訳ございません。今日のお話は録音をとりましたので、麻衣子さんのほうへお渡しいたします。

代りにはなりませんが、時間を少しだけ頂戴して、最後告別式の時に麻衣子様にご紹介をしてくださったエピソードをお話したいと思います。最晩年の富永先生のご様子です。

先生は最後までリハビリに熱心に取り組んでらっしゃいました。「今年の夏はアルプスに登ろうね」と言って、「僕はもっと、そのためにはもっとリハビリをやらなくちゃいけないんだ」とおっしゃって励んでらっしゃったことを話して下さいました。また、テレビでお相撲を見るのがお好きで、よくお2人で相撲観戦の時間を過ごされたそうです。ある時突然、「麻衣子、国技館に行こう」と言って、お嬢さまを国技館のほうへ連れてかれました。しかし、国技館の中入るわけではないのです。近くの本屋さんへ行って、相撲の決まり手の本を買って帰ってこられて、相撲を見たらどの決まり手になったかというのを一つ一つ確認をされた、というお話を告別式でされました。

その後、「この話、先生らしくて感銘を受けました」と連絡しましたら、麻衣子様のほうから「相撲の決まり手の本には赤い線をたくさん引いて、まるで学問の本を読むのと同じように、お読みになっていた」ということでした。

今日いろいろお話が出ましたように、どんなことにも、新しい面においても、真面目に一か

ら取り組むという先生のお姿が反映されていたのではないかと、というふうに思います。

最後に皆さんと共有したいエピソードがあります。僭越ですが、自己紹介を兼ねて申し上げます。

私は 1978 年に社会学に進学いたしました。ちょうど庄司先生が法政から東大にいらして、2 年生の教養学部での持ち出し講義のときに「社会学史」を受講しました。4 月になって本郷で富永先生の「社会学原論」の講義を初めて出席しました。印象に残っているのは、「自分が尊敬する高田保馬先生は、自分の背丈を越えるような本をお書きになったが。僕はまだ本があまり書いてない。せめて生涯にベートーヴェンが書いた交響曲の数と同じぐらいの本は書きたい」というふうにお話になっていたことです。（富永先生は生涯で 19 冊の単著を残されることになります。）

その時はまだ『社会変動の理論』の後の『新しい産業社会』、『産業社会の動態』を書かれて単著がしばらくいない頃だったので、まだ 3 冊、先生の意識としては 3 冊しかまだ単著が書いてないというふうに思われた時になります。その後、大学院生として過ごした時期が、ちょうど先生が「人類の知的遺産シリーズ」で『現代の社会学者』という本をお書きになっていたところに重なります。

今日皆さんにもご紹介したいと思うのは、お正月の時にゼミ生一同で先生のお宅にお邪魔した時に、うかがった言葉です。その時には、『現代の社会学者』の筆が暮れから正月休みにかけてだいぶ進んでこられました様子で、先生もそれを実感されたのでしょうか。先生は、「僕はあまり本が書けない、ぐずなやつだと思っていたけれど、最近いろいろアイデアが浮かんできて、俺もやるじゃないかって思った」とおっしゃられました。

「俺もやるじゃないか」と。

われわれ学問に関わる人間としては、積み重ねてきた研究の蓄積がある年齢に達して、自分の世界が広がってくるという経験をすることが理想でないかと思います。大学院生の頃に、先生に、学者として研究を積み重ねていくと、それがいずれ開花していくという姿をお側で見せていただいたことになります。私にとりましても、先生に師事できたことの一番のありがたい財産かと思ひまして、僭越ながら皆さまにとも共有させていただきました。

今日は予定時間を 1 時間半近くも超過した中で、いろいろお話をいただいて本当にありがとうございます。またこれをきっかけに、皆さんの中の富永先生の思い出を膨らせ、また先生とのそれぞれの思い出と共にお元気でご活躍いただくことが、富永先生に対する最大のご供養かと存じます。これを持ちましてこの会の結びとさせていただきます。

本日はどうもありがとうございました。

#### ◆徳安彰

田中さんが締めていただきましたので、これ以上閉会の言葉として申し上げることはございません。本日はどうも、ありがとうございました。